

サツマイモの魔法

東京国際大学商学部教授
川越いも友の会会長

ドゥエル・ベリー
(Barry Duell)

サツマイモも私も、アメリカ大陸より日本へ渡来したが、サツマイモの方が先だった。私の国、アメリカ合衆国が建国されるよりも前に、サツマイモは川越藩へ伝播していた。故郷はアメリカ西海岸のオレゴン州セーレム市で、北の方なのでサツマイモ畑は無いが、年中スーパーにサツマイモが並んでいる。ジャガイモの大産地であるアイダホ州とは州を接しているので、オレゴン州のイモというとジャガイモだ。

父の影響で、子供の頃からいつか日本へ行きたいという夢があった。第二次世界大戦中、19歳で父は徴兵され、南太平洋の戦場に居て、戦後、日本の占領軍要員であった。こうした背景もあって、私には日本人に対する良い感情があった。

1973年の秋、セーレム市にある私の母校ウィラメット大学では日本へ留学生を初めて送る計画があり、ウィラメット大学教授であった父の勧めで参加した。受け皿はウィラメット大学の姉妹校で、埼玉県川越市にある、今の東京国際大学だ。イモ煎餅、イモ羊羹、イモ松葉、イモ甘納豆などをその頃見たか食べたかの覚えはあるが、残念ながら焼き芋を食べた覚えはない。

1974年にウィラメット大学を卒業後、再び日本の川越へ引越し、東京国際大学で教鞭を執った。私の気になっていた川越のイ

モ娘とも結婚できた。「イモ娘」の呼称は当時、大変失礼な表現だったが、現在の川越では、サツマイモのイメージが改善され、“可愛い”という真味にもなってきたであろうか。

妻を通してある程度川越の社会へ入る切っ掛けにはなったが、なかなか困ったことも多かった。ドゥエル・ベリーとして社会で活躍するつもりだったが、川越にいる欧米人はわずかで私の顔はとても目立ち、同じような質問を繰り返し受けた。“箸は使える？”、“納豆は食べられる？”、“いつアメリカへ帰る？”、“英会話を教えてくれる？”などであった。

多少ノイローゼになった。なんで周囲の人たちは、私の顔しか見ないのだろうか。顔を無視してもらい、同じ人間同士で心の通じ合う方法はないかものかと思い悩んだ。“ひょっとこ”のような仮面をかぶって外出しようと思ったら、妻に止められた。

そして、サツマイモの素晴らしい魔法を受けるのはその後だった。川越より他所へ行き、“どこで住んでいる”、“川越”、“イモの町だ”のような会話だった。日本中どこへ行っても同じだった。その当時、相手は川越やイモを多少バカにしているのか本当にほめているのか、その意味は良くつかめなかった。川越ではサツマイモ畑やサツマイモ商品などがそれほど目立つ訳ではな

いので、イモの町のイメージがあることについては不思議だなと思っていた。

比較食文化に興味を持つ私は東京の大学院へ通い、卒業論文のテーマを結局日本へサツマイモはどのように伝来し、普及してきたかというテーマにした。川越とサツマイモの不思議そうな関係もたっぷり調べようと思ったら、文献はなかなか見つからなかった。とうとう、川越市立図書館で埼玉の歴史研究誌にあった井上浩先生（現日本いも類研究会会長）が書かれていた論文を紹介していただいた。その後、井上先生にお会いすることもでき、早速、会員2人の川越いも研究会を立ち上げ、サツマイモの情報交換はどんどん進んだ。それは1981年のことであった。

次の年である1982年は、川越市制60周年記念だった。その年の秋、まだ川越市の公務員だった山田英次さん（現川越いも友の会事務長）を中心に「さつまいもトータル学」という公民館主催講座を設けた。会員が7人になっていた川越いも研究会の他、イモ農家、イモ菓子屋、郷土料理屋などに呼びかけ、様々な人に講師になっていただいた。

私たち受講生や講師はそれまであまり面識はなく、サツマイモに対する興味の分野はそれぞれ違う私たちにとって、お互いに大変な刺激となった。サツマイモを見る視野は次第に広がっていった。イモについての関心や好奇心は高まり、もっともっと知ろうと思い、イモ活動を始めようとの声も

上がってきた。それで1984年、「川越いも友の会」は生まれ、サツマイモに関するシンポジウム、栽培、料理講習会、祭、俳句募集、見学会のほか、サツマイモ資料館設立などの様々な活動を行い、1991年、サントリ地域文化賞までいただいた。

振り返ってみると、サツマイモの魔法により、イモ仲間は少しずつ増え、同時に川越の町おこし活動をしながら、川越の社会に入る道が見つかったことが分かってきた。一石二鳥だ。それはハリー・ポッターに出てくるロンドンのキングス・クロス駅でホグワーツ魔法魔術学校へ向かうホグワーツ特急に乗るための、秘密の9と3/4番線ホームと似ている。普通の人には見えないホームだ。

もしかしたら、サツマイモの魔法を浴びるために13番線ホーム（1639年に中国で刊行された「農政全書」にサツマイモは13の利点があると記載された）でサツマイモ特急に乗っていたのかもしれない。私のような目立つ人だけではなく、川越新市民なども地域に溶け込む一つの“^{わざ}技”であるサツマイモの魔法を、これからもおいに活用いただきたいものだ。

川越いも友会の会員は、川越以外のサツマイモに関心がある皆さんとお付き合いもできたし、海外でのイモ見学やイモ学会への参加などもあった。また、海外から川越などへの来訪者対応も行ってきた。これからもサツマイモの魔法を期待している。